

# 町医者だより

平成23年11月号

## 乳幼児喘息治療の難しさ

＜発行・お問合せ先＞

おおわだ内科呼吸器科

院長 大和田 明彦

市川市南八幡4-7-13

シャポール本八幡2階

JR本八幡駅南口(シャポール改札口)

1分ミスタードーナツ並び

ヘアサロンAsh向かいビル2階

電話047-379-6661

おおわだ  
内科  
呼吸器科

5歳以上のお子さんの喘息治療は成人の治療と同様に気管支の慢性的な炎症を鎮静化するために、吸入ステロイドが第一治療選択薬です。シングレアやキプレスなどのロイコトリエン拮抗剤と呼ばれる内服薬やホクナリンテープなどのベター2気管支拡張剤の貼付は主役ではなくわき役と考えるべきです。しかし実情からいえばロイコトリエン拮抗剤とホクナリンテープという処方方が圧倒的に多いのが実情だと思えます。今回ニューイングランド医学雑誌の本年11月24日号の乳幼児に関する喘息治療の論文を通して乳幼児喘息治療について考えていきます。

### パルミコート吸入液による乳幼児喘息治療の報告

喘息と診断された生後1歳から56か月（4歳8か月）までの乳幼児を2群に分けます。パルミコート吸入液（0.5mg）を毎日1日1回吸入していく群と呼吸器症状（前もってどのような症状や所見、たとえば発熱や夜間の咳など診断基準があらかじめ設定されている）が出現した時だけ、パルミコート吸入薬を1回1.0mgで1日2回の吸入を1週間続ける群に分けます。どちらも治療を1年間続けて内服ステロイドを使用しなければならないような喘鳴発作の頻度など比較しています。成人でもそうですが乳幼児も風邪などの気道炎症をきっかけに喘息が悪化して、咳が増えたり喘鳴が出現したりすることが多いです。

### 断続的なステロイド吸入で呼吸器感染症などに伴う喘鳴は予防できる

結論を言うと風邪などの呼吸器症状が出現した時点から高用量パルミコート吸入を短期間使用することで喘鳴出現を抑えることが可能で、これは毎日パルミコート吸入を続ける場合となんら遜色ないという結論でした。とこの論文を読んで思わず首をひねってしまいました。まず著者らがいうには断続的に高用量のパルミコート吸入を使った頻度は3.5ヶ月に一度、つまり1年に3回程度です。この調査の対象のお子さんの毎日の咳の頻度はどうだったのか論文から読み取れませんが、かなりの軽症群で、吸入ステロイドも1年間毎日吸入させなくても例えば1-2ヶ月連続使用して中止するような治療選択も可能なのではないのでしょうか。また、1年に3回程度の発作ならば内服ステロイドを服用してもらい、それも短期間（当院ではおおむね4日間）で重大な副作用が出るとは思えません。この論文は吸入ステロイドの安全性（身長への影響）を懸念して行った、と述べていますが、その逆でパルミコート吸入剤の販売促進のための論文に思えてなりません。また、一番肝心の気道炎症の制御や呼吸器機能の維持への影響についてまったく言及していません。

### 吸入ステロイドでの身長への影響は成人になればありません

小児科医が吸入ステロイドで身長の伸びが止まることを懸念しています。それなら効率の悪いネブライザーをやめてエアロチャンバーなどのスパーサーを用いてキューバルやフルタイドなどを使用してはどうでしょうか。無駄に吸入ステロイド量を増やさなくても済みます。当院でも4歳以下のお子様にも1日200マイクログラムの吸入をしてもらっていますが身長の伸びは問題になりません。喘息は遺伝的な背景があって小児期から成人に持ち越すことが今まで考えられていた以上に多いと思えます。きちんと統計処理をしようと思っていますが、小児喘息（4歳以下を含む）の既往がある成人喘息患者さんの呼吸機能は小児期に症状がなかった患者さん比べて明らかに低下しています。小児喘息治療は20年30年先を見据えて行うべきです。